

看護学生の老人イメージに関する研究 －入学時、老人看護実習終了後の比較－

小川亜矢 深江久代 三輪真知子 今福恵子

A Study of Nursing Student's Image of the Elderly
Comparing the Images before with those after Geriatric Nursing Practice

Aya,Ogawa Hisayo,Fukae Machiko,Miwa Keiko,Imafuku

I. はじめに

我が国において高齢者の増加は著しく、高齢患者や家族にそった看護の提供が急務となっている。高齢患者は複数の疾患を持ち、慢性的に経過しやすいなどの特徴から、疾患中心ではなく生活志向で、日常生活の自立や QOL の向上を目指した看護の実践が重要である。そのためには高齢者について具体的にイメージすることが必要である。

しかし核家族化や家族のあり方そのものの変化等により、学生は日常生活の中で高齢者と接する機会が殆どなく、同居している学生でも高齢者と接する機会は少なくなっている。そのため、高齢者について漠然としたイメージを持ち、学生が接したことのある高齢者の特徴だけで、イメージ化することが多いと考えられる。

学生の老年観が、今後の高齢者に対する看護実践に影響することを考慮するならば、高齢者理解のための教育は、大変重要なことである。本校においては、老人看護概論の擬似体験や高齢者の生活史についてのインタビューを課題として出すなどの工夫をしている。また老人看護実習では、健康障害の基礎にある老化、加齢による身体的・精神的・社会的変化についての理解や、日常生活の自立を目指した看護などについて、実践を通して理解が深められるよう教育している。

そこで本研究では、看護学科学生の高齢者に対するイメージを入学時と実習後で比較し、その変化の実態を明らかにすることを目的として取り組んだ。

II. 研究方法

1. 調査対象

本学平成 11 年度第一看護学科入学生 61 名、平成 12 年度第二看護学科入学生 40 名、計 101 名を対象とした。

2. 調査期間と方法

調査期間は、平成 11 年 4 月から平成 13 年 7 月である。調査の第 1 回目は入学時(老人看護概論の初日の講義時)、第 2 回目は老人看護実習終了後で、質問紙における調査をおこなった。

1) 老人看護学に関する履修状況

第一看護学科は 1 年次老人看護概論 (1 単位)、2 年次老人看護 I (1 単位)・II (1 単位)を、第二看護学科は 1 年次老人看護概論 (1 単位)、老人看護 (1 単位)を履修後に、老人看護実習 (1 単位)を履修している。

2) 実習場所

静岡市、焼津市にある介護老人保健施設 5 箇所である。

3) 実習内容

実習内容は介護老人保健施設の目的を理解した後、1 名の入所者を担当し、看護技術 (バイタルサインの測定、入浴介助、食事介助、排泄介助、診察介助、移動介助、機能訓練の個別指導や集団療法など) の実践や看護過程の展開をおこなっている。また、入所判定会、通所リハビリテーションの参加や、ケアハウス、在宅介護支援センター、居宅介護支援事業所などの見学をしている。

4) 実習期間

第一看護学科は 3 年次、第二看護学科は 2 年次のそれぞれ最終学年次に 5 日間の実習を体験する。

3. 調査項目と内容

調査内容は多田¹⁾ が用いた質問用紙を使用した。内容は、対象の属性、高齢者に接する機会の有無や高齢者に対するイメージについてである。高齢者に対するイメージについては、SD 法を用いて調査した。肯定的な内容と、否定的な内容を 7 段階の尺度で表し、質問項目の配列は、学生が意識的に評価しないよう、無作為に並べた。

4. 集計および分析方法

アンケートの集計方法は、高齢者に対するイメージについての項目ごとに、7 段階の尺度をつけた。尺度の中央値を 0 点とし、肯定的なものには 3 点を、否定的なものには -3 点をつけ平均値を算出し、プロフィールを作成した。

分析は統計学的な有意差を表すため、頻度はカイ二乗検定を用いた。入学時と老人看護実習終了後の高齢者のイメージの変化を見るために、対になっている肯定的な項目と否定的な項目の 2 群に対し、平均値の差を t 検定した。

III. 研究結果

対象学生の回答者数は 1 回目の調査では 98 名 (回収率 97.0%)、2 日目の調査では 97 名 (回収率 96.0%) であった。

1. 対象者の基本的属性

高齢者との同居については「同居している」が35人(36.0%)、「同居していない」が63人(64.0%)であった。

入学時の調査では、同居している35名の中で同居期間が「20年以上」は2名(5.7%)、「15～20年未満」24名(68.6%)、「10～15年未満」3名(8.6%)、「5～10年未満」4名(11.4%)、「1～5年未満」2名(5.7%)、「1年未満」0名であった。また同居しているのは「両方」23名(65.7%)、「祖母のみ」10名(28.6%)、「祖父のみ」2名(5.7%)であった。同居している祖父母の健康状態については、「無職であるが家庭内で役割を持っている」20名(57.1%)、「元気で仕事をもっている」10名(28.6%)、「入院中である」3名(8.6%)、「病気がちで自分のことだけができる」「家庭にて療養中で世話を必要としている」は各1名(2.9%)であった。

同居していない63名の中で同居経験が「ある」と答えたものは15名(23.8%)、「ない」48名(76.2%)だった。祖父母との交流の機会については「ある」46名(73.0%)、「ない」17名(27.0%)であった。祖父母は健在かの問いに「どちらか一方が亡くなっている」48名(76.2%)、「全員健在である」10名(15.9%)、「全員亡くなっている」5名(7.9%)だった。

2. 高齢者との関わりの実態

表1 看護学生における高齢者との関わりの実態

入学時	同居群	別居群
祖父母との会話		
よくする	17 (48.6)	12(19.0)
時々する	13 (37.1)	23(36.5)
あまりしない	3 (8.6)	13(20.6)
全くしない	2 (5.7)	15(23.8)
高齢者問題への関心		
ある	27 (77.1) *	37(58.7)
あまりある方ではない	8 (22.9)	24(38.1)
無回答	0 (0.0)	2 (3.2)
高齢者と接する機会		
ある	16 (45.7) **	15(23.8)
ない	19 (54.3)	47(74.6)
無回答	0(0.0)	1(1.6)
	** : $p < 0.05$ * : $p < 0.10$	

表1には高齢者との関わりの実態を表した。祖父母との会話頻度については、同居群では「よくする」「時々する」の両者をあわせると85.7%であったが、別居群は55.5%と会話の頻度が少なかった。また同居群が「あまりしない」「全くしない」をあわせて14.3%に対し、別居群では44.4%と多かった。

高齢者や高齢者問題への関心の有無は、同居群では「ある」27名(77.1%)で、別居群37名(58.7%)に比べ多く、統計学的にも同居群、別居群の間には有意な差が見られた($p < 0.10$)。祖父母以外の高齢者との接する機会の有無について

同居群は「ある」16名（45.7%）、別居群は15名（23.8%）で、同居群、別居群の間には有意な差が見られた（ $p < 0.05$ ）。

3. SD法による高齢者に対するイメージ評価

1) 入学時のイメージ ー同居群、別居群の比較ー

図1は入学時の調査による平均値を同居群、別居群別に表した。統計学上有意な差が見られたのは「自立的ー依存的」で、別居群は「自立的」の肯定的イメージが強く、同居群では「依存的」の否定的イメージが強かった。

2) 実習後のイメージ ー同居群、別居群の比較ー

図2は実習終了後の調査を示した。有意な差は「たくましい」、「親密な」、「明るい」、「幸福な」の4項目であった。この項目において別居群に比べて同居群の方が、4項目すべてにおいて肯定的イメージが強かった。この4項目のうち、入学時と比べて否定的なイメージから、肯定的なイメージに変化したのは「たくましいー弱々しい」の1項目であった。

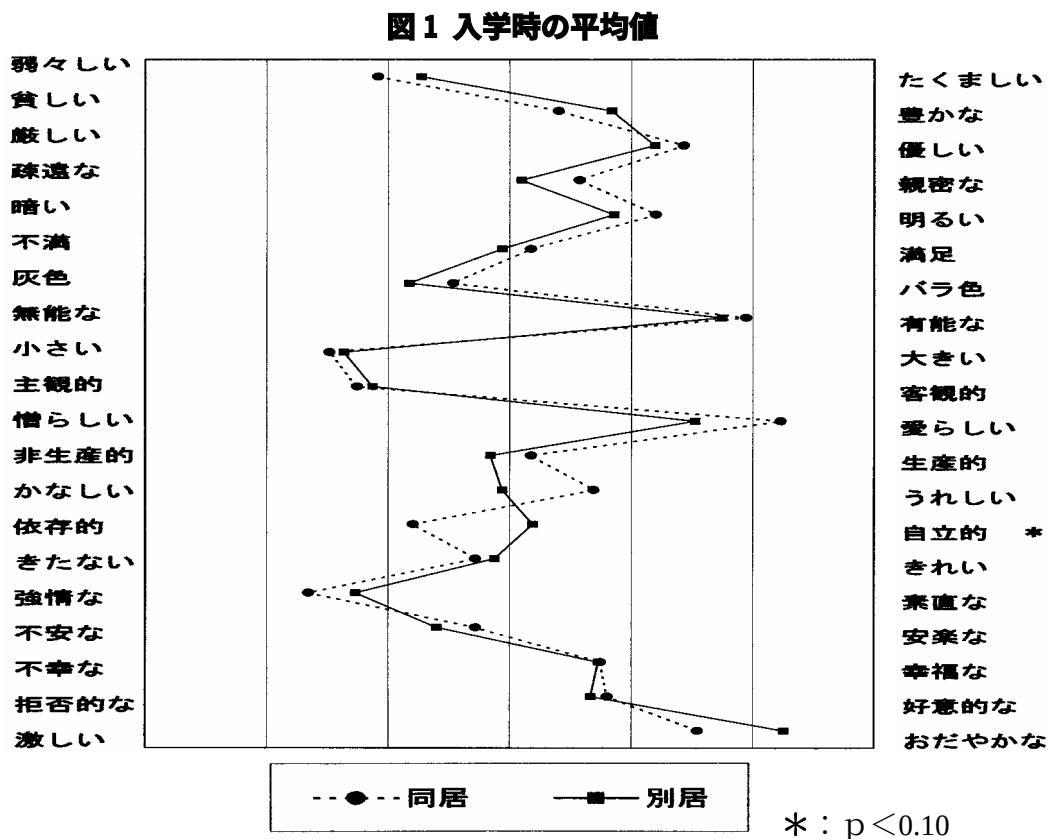
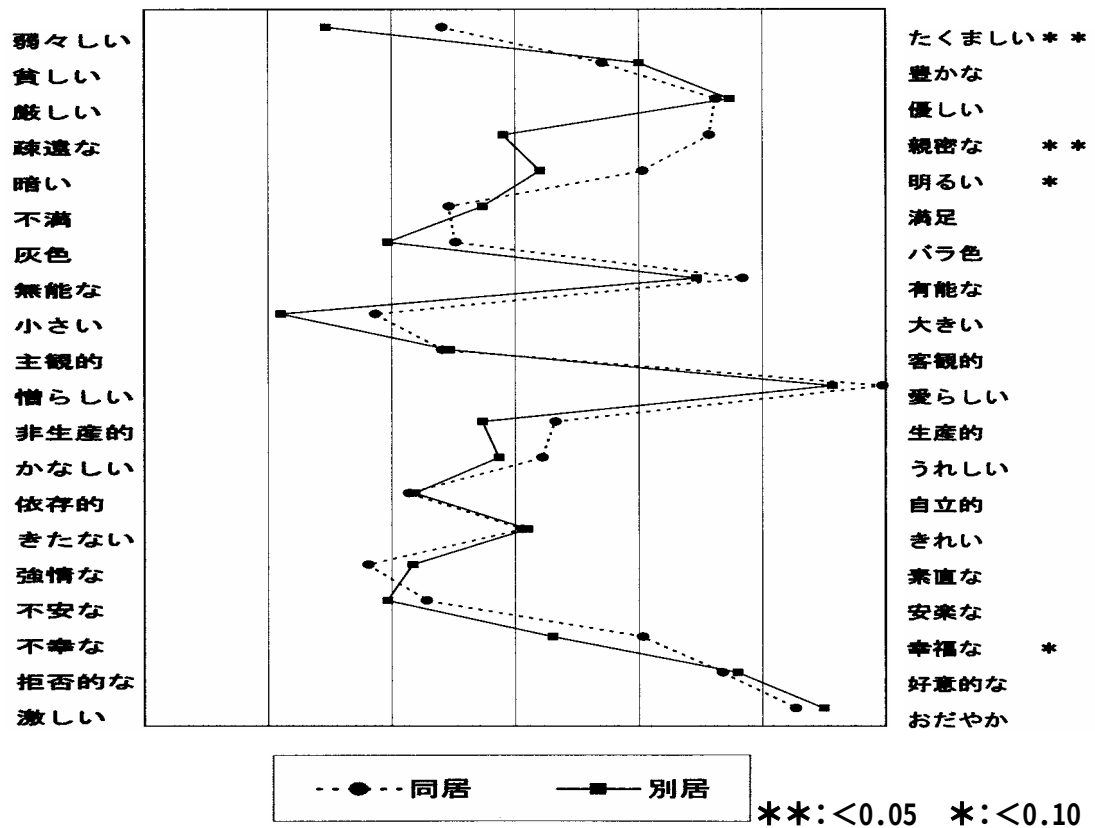


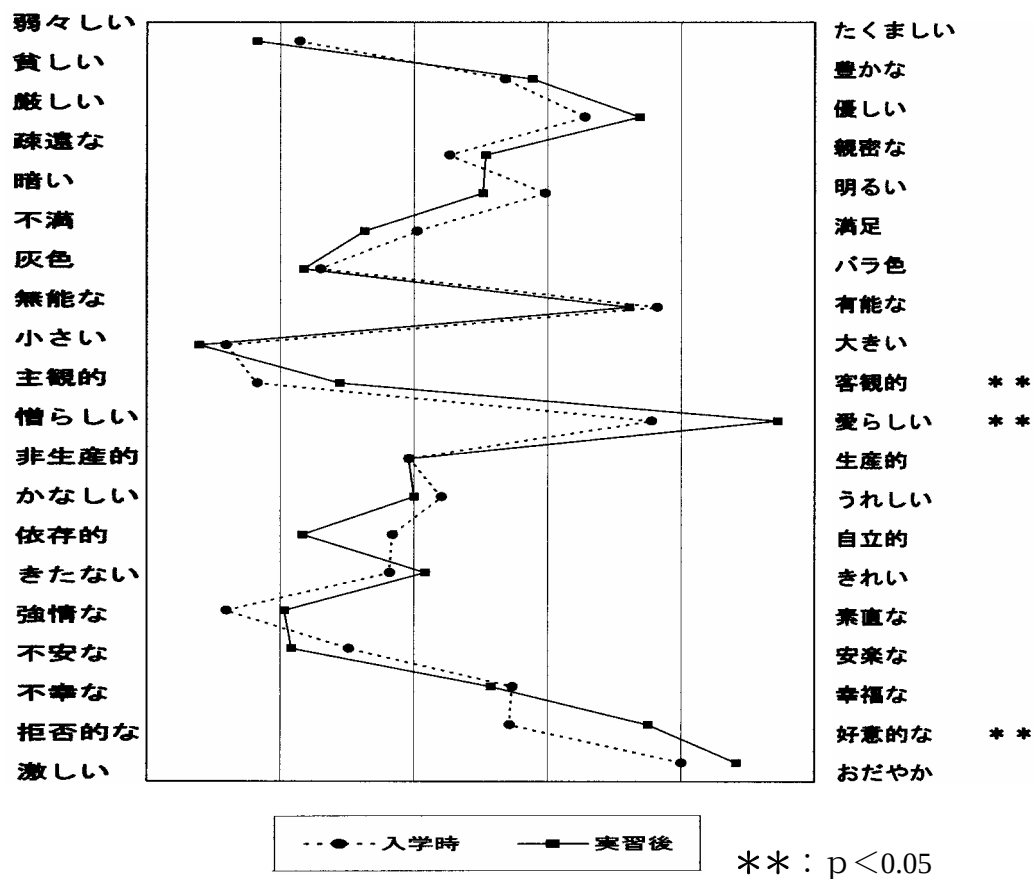
図2 実習後の平均値



3) 入学時と実習後のイメージ

図3、表2は入学時と老人看護実習終了後の高齢者に対するイメージの変化について表した。

図3 入学時、実習後の平均値



全項目の平均値を肯定的なもの 3.0 から否定的なもの -3.0 までの 7 段階の尺度で表し、各形容詞対で平均値を求めた結果、入学時 2.021、実習後 2.744 と平均値は入学時よりも実習後の方は肯定的イメージが強くなっていた。同居群、別居群別に見ると、入学時は同居群 0.114、別居群 0.090、実習後は同居群 0.123、別居群 0.141 であり、共に肯定的イメージであった。入学時の値は別居群に比べ同居群は肯定的イメージが高く、実習後は別居群の肯定的イメージの値が同居群に比べ 0.018 高かった。

項目ごとに見てみると、入学時より実習後に肯定的イメージが強くなったものは 20 項目中 9 項目で、「豊かな」「優しい」、「親密な」、「客観的」、「愛らしい」、「きれい」、「素直な」、「好意的な」、「おだやかな」であった。平均値の差でマイナスの結果を表しているものは、入学時よりも実習後の値が下がったため、否定的なイメージが強くなったことを示す。それは 20 項目中 10 項目みられた。それらは「弱々しい」、

「暗い」、「不満」、「灰色」、「無能な」、「小さい」、「かなしい」、「依存的」、「不安な」、「不幸な」であった。統計学的に有意差が見られたものは 20 項目中 3 項目で、「主観的－客観的」、「憎らしい－愛らしい」、「拒否的－好意的」であった。

表 2 入学時と実習終了後の高齢者に対するイメージの変化

項目	平均値の差	p 値
弱々しい⇄たくましい	-0.159	0.341
貧しい⇄豊かな	0.103	0.535
厳しい⇄優しい	0.206	0.232
疎遠な⇄親密な	0.135	0.480
暗い⇄明るい	-0.232	0.105
不満⇄満足	-0.196	0.191
灰色⇄バラ色	-0.062	0.645
無能な⇄有能な	-0.104	0.533
小さい⇄大きい	-0.100	0.574
主観的⇄客観的	0.309	0.034 *
憎らしい⇄愛らしい	0.473	0.002 *
非生産的⇄生産的	0.000	1.000
かなしい⇄うれしい	-0.102	0.523
依存的⇄自立的	-0.335	0.069
きたない⇄きれい	0.051	0.220
強情な⇄素直な	0.220	0.146
不安な⇄安楽な	-0.213	0.165
不幸な⇄幸福な	-0.079	0.532
拒否的な⇄好意的な	0.519	0.001 *
激しい⇄おだやかな	0.206	0.204
		* : $p < 0.05$

IV. 考察

65 歳以上の同居について国民生活基礎調査²⁾の結果を見ると「子と同居している者」の割合は 52.8%であった。本校での調査では 65 歳以上と限定しなかったが、同居率 36.0%と明らかに低かった。

高齢者との会話頻度について同居群と別居群とを比べると、別居群は同居群と比べが少なく、高齢者問題への関心についても別居群は関心が低かった。

この結果より、高齢者と接する機会の多い同

居群は高齢者問題への関心が強く、高齢者の理解には生活経験との関連性が大きいと考えられる。また、高齢者のイメージを形成する上で同居経験の有無は影響するとの報告もある³⁾。このような背景から今回の調査では同居群、別居群での比較を行った。

図 1、2 より入学時、実習後の調査結果を同居群、別居群でみると統計的に有意差を認めた項目は、入学時で 1 項目、実習後は 4 項目であった。

入学時は「自立的－依存的」の項目が有意差を認め、同居群は「依存的」イメージが強く、別居群は「自立的」イメージが強かった。この結果は、同居群の場合、身体的に手助けが必要な状況となり同居をしている場合や、高齢者が人に頼る場面等を身近に感じていることから、「依存的」なイメージが強くなる。逆に別居群は、まだ同居が必要ではなく身体的に不自由のない祖父母と関わっていることが多いため、「自立的」イメージが強くなると考える。

実習後は「たくましいー弱々しい」、「親密なー疎遠な」、「明るいー暗い」、「幸福なー不幸な」で有意差を認めた。同居群は別居群に比べ「たくましい」、「親密な」、「明るい」、「幸福な」という印象を持っていた。同居群は祖父母の健康状態について「無職であるが家庭内で役割を持っている」20名(57.1%)、「元気で仕事をもっている」10名(28.6%)、「入院中である」3名(8.6%)、「病気がちで自分のことだけができる」「家庭にて療養中で世話を必要としている」は各1名(2.9%)と答えている。この結果より、同居群が同居している祖父母は家庭内外での役割を持っているものが85.7%を示し「たくましい」、「明るい」、「幸福な」というイメージが強くなると考えられる。別居群は同居していないことから「疎遠な」というイメージが強く、また介護老人保健施設での実習後であるため、殆どの学生が虚弱高齢者との関わりを持った経験から「弱々しい」、「暗い」、「不幸な」というイメージが強くなったと考える。

図1、2から同居群と別居群の変化が肯定的にも否定的にも大きな平均値の変化がでた。図3の入学時、実習後イメージの変化から見ても、入学時よりも実習後のほうが平均値の値が大きく変動していることが読み取れる。これらは学生が祖父母と「同居していない」ものが64.0%であり、また祖父母との会話頻度は「あまりしない」「全くしない」を合わせて同居群14.3%、別居群44.4%ということから、別居群は高齢者と関わる機会が少なく高齢者に対するイメージが抽象的であったものが、老人看護実習やその他の実習で高齢者と関わることにより、学生は肯定的にも否定的にも高齢者に対し具体的かつ強いイメージを持つためと考える。また、学生自身が今まで高齢者をどう捉えてきたのかということも関係する。学生が持っている高齢者のイメージは、今までの経験や環境により左右される⁴⁾。実習の場において自分の関わった高齢者が、自分の持ち合わせていたイメージと異なる場合、高齢者には個別性があるということが実感できる。これらの経験からも学生は、より具体的イメージを持つと考える。

表2から、全項目から求めた平均値が入学時2.021、実習後2.744と共に値がプラスを示し、本学学生は高齢者に対して肯定的イメージを持っていることがわかる。また、入学時の平均値よりも実習後のほうがより肯定的イメージを示す値が大きくなっていた。これは老人看護実習及び成人看護実習などで高齢者と関わり、学生自身が身体面や家庭の事などについて相談され、高齢者から頼りにされる、排泄介助などの起居動作に対する援助をし、接する機会を持つ、会話を通し高齢者の人生経験に接し敬う気持ちを得る、などの機会を持つことにより、肯定的イメージが高まったと考える。しかし、図1を見ると、全20項目中否定的イメージを示したものは入学時8項目、実習後9項目を示し、その中で入学時よりも実習後のほうが、否定的イメージが強くなったものが3項目あった。これは老人看護実習では、介護老人保健施設で実習をおこなっているため、施設の現状として中間施設でありながら在宅復帰が難しい入所者が多いこと、障害を持った後期高齢者が多く「弱々しい」「小さい」「依存的」「不安な」といった高齢者の

身体状況に関するイメージが付きやすいこと、面会者が少ない入所者も多く「不安な」「不幸な」といったイメージをもったのではないかと考える。

本研究の限界は 2 点ある。1 つ目は、今回は多田¹⁾ の質問用紙を活用したが、否定的、肯定的イメージとして捉えている項目は、学生本来の気持ちが正しく反映されているかを判断するのは難しい。例えば「弱々しい」という項目は、学生にとって高齢者を守ってあげたいという感情表現の 1 つとしてとらえる事もでき、単に否定的イメージで捉えていいのかという思いもある。2 つ目は社会性、精神性、活動性などに因子を設定し因子分析する際、因子設定に必要な情報が不足していることである。以上の 2 点より、調査項目の妥当性についての検討が必要である。

V. 結論

本学科学生の持つ高齢者のイメージを SD 法により評価し、以下の事が明らかとなった。

- 1) 本学看護学科学生は高齢者との同居率が低い。
- 2) 高齢者との同居群と別居群とを比べると別居群は同居群と比べ高齢者との会話頻度が少なく、高齢者問題への関心についても別居群は関心が低かった。
- 3) 同居群、別居群では別居群の方が肯定的にも否定的にも強いイメージを持つことが、明らかとなった。
- 4) 入学時のイメージでは 20 項目中 1 項目、実習後は 20 項目中 4 項目において、統計学的な有意差をみとめた。入学時では同居群が「依存的」、別居群が「自立的」というイメージが強かった。実習後では別居群と比較すると同居群は「たくましい」、「親密な」、「明るい」、「幸福な」というイメージが強く、別居群は「弱々しい」、「疎遠な」、「暗い」、「不幸な」というイメージが強かった。
- 5) 高齢者と接する機会については、同居群は別居群よりも接する機会が多く、統計学的にも有意な差が見られた。
- 6) SD 法によるイメージの評価では、全体的に肯定的イメージを持っていた。
- 7) 入学時、実習後の高齢者に対するイメージの変化では、20 項目中 3 項目において、統計学的に有意な差を認め、入学時よりも実習後のほうが肯定的にも否定的にも強いイメージを持つことがわかった。

以上のことから、臨地実習において高齢者に接する機会を提供する必要性がわかった。今後は、高齢者看護では生活志向が中心に看護が展開されることから、高齢者に対するイメージを具体的に把握していけるような関りを学生としていくことを課題としていきたい。

VI. 引用・参考文献

引用文献

- 1) 多田敏子：老人看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化，老年看護学第1巻1号，P63-70，1996
- 2) 平成12年国民生活基礎調査：ホームページより検索
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa00/65-2a.html>
- 3) 馬場純子 他：中学生の老年観－老人観スケールによる測定－，社会老年学第38巻，P3 - 11，1993
- 4) 忠津佐和代 他：育児における Aging Education の必要性の考察－Aging Education の文献研究，看護教育，35（8）：619－623，1994

参考文献

- 1) 大塚邦子 他：看護学生の老人のイメージに関する研究，老年看護学第4巻1号，P98-104，1999
- 2) 寺島喜代子 他：看護学生の老人イメージについて－老人イメージスケールを用いて－，福井県立大学看護短期大学部論集第8号，P29 - 38，1998
- 3) 保坂久美子 他：大学生の老人イメージ－SD法による分析－，社会老年学第27巻，P22 - 33，1988
- 4) 吉村洋子 他：看護学生の老年観に関する研究（1）－高齢者に関連する生活背景から－，福井県立大学看護短期大学部論集第9号，P1-11，1999
- 5) 石井知子 他：高齢者看護の教授方法を考える－看護学生の老年看護学学習前後の高齢者イメージの変化－，聖マリア学院紀要第14巻，P67 - 70，1999
- 6) 長嶋紀一：老人のイメージについて，看護技術第20巻1号，P138 - 150,1974
- 7) 瀧断子 他：老年看護実習前後の老年者に対するイメージの変化，東京女子医科大学看護学部紀要第2号，P35 - 43，1999

（2003年3月20日 受理）